

上野千鶴子「(ミッドナイト・コール) 専業主婦願望」(『朝日新聞』八十九年六月十一日朝刊)

上野千鶴子は今、元気印のフェミニズムの旗手の一人である。私はまだ不勉強でフェミニズムの流れをつかみえていない。そのような私にも彼女の刺激的な言辞は届いてくる、いはく「男は定年を迎えると産業廃棄物になる」。彼女の提起が傑出しているのは、資本主義下の労働崇拜の中で、労働ということに常に疑問を提出していることである。それは近代を根底的に越えんとする試みではないだろうか。

この論攷最近の女性への世論調査の結果の専業主婦願望を論拠にしている。これは一見、今までのフェミニズムの運動が男との対等性として職場へのキャリア・ウーマンとして参加するという地平から後退している、と見られる。だが、実は競争原理から降りるという消極的ではあるが、はっきりとした意志表示としてとらえなおしている。

逆に言えば、消極的なところで、ジェンダー（性分業）にのったところで語っても仕方がないと言えし、両面性があるということであり、現実的なところでは何も見えていない。

彼女はここでは視点を問題にしているに過ぎない。しかし、その視点が現在的に重要である。

私はそれを反差別論の視点から読み解く。

初期のフェミニズムは女性の社会参加ということで、競争原理に飲み込まれる可能性がある。それは労働力の価値を巡る差別に飲み込まれていくことを意味する。一方で対等なキャリアとして参加しえているのは一部のエリートだけである、という現実がある。

それは障害者についても言える、障害者がほとんど社会から排除されていたことから、能力さえあれば社会参加できるとされ、一方で「重度」の障害者は切り捨てられ、「軽度」の障害者には「甘え」という言葉が投げ付けられる。

女性も障害者も社会参加ということにおいて幻想にとらわれてきた、前に比べたら社会参加していく人が増えてきている。その延長線上に「解放」があると。それに対して上野氏はこの文章の中でそれを幻想として示し、そのことに価値を見いだすことに疑問を呈しているのではないだろうか。そしてそもそも世界観的なところから問題にし、ひっくり返そうと提起しているのではないだろうか。

差別を問題にしていくとき、その運動が時に別な差別に巻き込まれる、更に他者への抑圧者一差別者として立ち現れてしまう危険性をもっている。そのことはインドのアウト・カーストとインドナショナリズムの対立として現れている。

イギリスの植民地主義と闘うインドナショナリズムの形成がカースト制度を固定化強化していったこと。またアウト・カーストの初期の闘いがイギリスの植民地支配を賛美して

いたこと（それは小谷博之『大地の子』（東京大学出版会）に詳しい。）。また、イギリスの植民地主義と闘ったガンジーがカースト制度を守るために命をかけて断食までした、非暴力主義のガンジーが差別という暴力を正当化して、差別者として「闘った」という背理をみすえねばならない。

差別を「あれかこれか」的にとらえてしまう時、差別の重層構造が見えなくなり、差別と闘っている人が、差別者として立ち現れる、ということから目をそらしてはならない。差別とは何かという根源的なとらえ返しが必要である。

上野氏の文は、既製の価値観をとらえ返し、問題を根底からとらえていくという姿勢を提起している。

（書子）